

神なき人間の

辻 憲男（文学部教授）

「悦子はその日、阪急百貨店で半毛の靴下を二足買った。紺のを一足。茶いろを一足。質素な無地の靴下である」。それを買物袋の底へ深く蔵（しま）った時、窓に稲妻がはためき、雷鳴がとどろいた。早々に電車に乗り、岡町から田舎道を帰った。外出中、義父は悦子の日記を盗み読んでいた。「ザボンございませんでしたのよ。ずいぶん探しましたのに、ございませんでしたわ」「そりゃ、残念だった」。秋の彼岸に亡夫の好物を供えるつもりで出かけた。日記がニセモノであることを、義父は知らない、「こうまで人間が自分の心を巧みに偽られるものだとな誰が想像することができよう」。中の女性名のSとは、じつは悦子が心にかけている若い園丁・三郎のことである。あの二足を彼に与えよう。それが悦子にとって、今夜を明日へつなぐ希望であった。そこにみずからの生の「からっぽで清浄な意味」を見出した…（三島由紀夫『愛の渇き』）。

作者は後に創作の秘密を明かした。昭和24年の夏、叔母から婚家の農園の話聞いた。その時突然、物語の筋が「ほとんど首尾一貫して脳裡にうかんだ」。宝塚に宿をとり、農園へ取材にかよった。前に読んだモーリヤックの『テレーズ・デケイルゥ』の影響がある。ギリシャ劇やフロイトにも学んだ。夫の背信に苦しんだ主人公は、決して「自分以外のものにはなりたくない」。神なき人間の生の渇き、あるいは「幸福」。悦子の希望は裏切られ、破局がおとずれる。冒頭の稲妻と雷鳴は、物語の終末のおそろしい予兆としてある。



「杉本農園」は千里丘陵の端にあった。
いま大阪府豊中市旭丘。